

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	有田 栄
主な担当科目	音楽教養演習Ⅰ,音楽教養演習Ⅱ,音楽教養演習Ⅲ,音楽教養基礎,音楽芸術運営基礎演習,音楽芸術運営特別演習①,音楽芸術運営特別演習②,音楽研究法基礎(音楽と文化),音楽指導論特殊講義,音楽美学A,音楽文化研究Ⅳ,西洋音楽史Ⅰ_B,西洋音楽史特殊講義A,西洋文化史Ⅰ,西洋文化史Ⅱ,卒業研究_音楽教養,博士音楽美学特講Ⅰ,博士論文演習①,博士論文演習②③
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	学部・短大においては、学生の多様な背景(文化的背景の相違、レディネスの相違、学修目的の相違)を考慮してきめ細かく指導を行い、学生自身が自発的な学修へのモチベーションを保つことができるような工夫を試みる。大学院については、音楽に関する学びの専門性に対する学生の意識を高めるため、新しい知見を取り入れるとともに、研究倫理・職業倫理等に対する学生の意識を向上させる取り組みに一層力を入れる。とりわけ博士後期課程においては、自立した研究者としての自覚を促すための教育を徹底する。
2024年の教育に関する自己評価	学部・短大の教育においては、担当する各科目で教材を見直した。学生が関心を持てるよう内容をアップデートするとともに、理解しやすい表現やレイアウトに絶えず入れ替えている。また通年科目では引き続き中間段階で授業内試験およびその追試・再試を行って、学修内容を定着させ、学修成果を「見える化」することに力を入れた。特に音楽教養コースの各科目では、コースカリキュラムの特徴を明確に出せるインタラクティブな授業内容・方法を常に模索しているが、一定の成果は上げていると考える。／大学院では、修士・博士とも専門性の高い内容を積極的に取り上げ、学生が広い視野から自身の研究やキャリアの展望を持つことができるよう指導に務めた。特に新しく立ち上げた音楽と文化コースの各授業では高度な内容の指導を行うことができ、学生の学修に大きな成果を上げられたと考える。／今年度も学部・短大・院を通じて学生の進路相談・学修相談が多かったため、できる限り丁寧に応じ、問題を学生と共に解決しようと試みた。学生支援という意味では、学部生の大学院への進学希望者の相談には、今後の教育への課題が多く含まれていることを認識しており、これを何らかの形で共有したいと考えている。特に大学院は他大学からの進学者大多数を占め、そのうちの大多数が留学生であることから、文化的背景(異なる大学の文化、異なる国の文化)の違いを背景とする課題がますます顕著に浮かび上がってきている。精一杯の努力はしているものの、教員個人のレベルで解決できないことも多く、こうした課題を今後さらに積極的に大学教学・運営組織に共有・学内発信しながら対処していきたい。
2024年のFD活動に関する自己評価	学部・短大・大学院FD委員長としてFD活動に積極的に取り組んだ。全体研修会に関しては、現代の大学教員に必要な情報や職能開発、社会から求められる資質を常にリサーチし、研修会テーマ等として積極的に提案している。分科会FDでは、教員相互の連携とコミュニケーションの向上、また修士論文の指導に関する情報共有や、卒業研究の指導に関する情報共有(いずれも特に専任教員⇔非常勤教員)等に重点的に取り組んだ。
授業改善のために取り入れた研修内容	「大学における異文化コミュニケーション」から、文化的背景の異なる学生とのコミュニケーションについての知識。

2023 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1628 教員名:有田 栄

1)アンケート結果に対する所見

結果はおおむね予想通りである。現在担当している授業は多くが演習授業であるため、学生とのコミュニケーションはおおむね取れており、授業の狙いや、なぜそれを取り上げているかという意図を理解して受講してもらうことができていると思う。

かなり高度で難しい内容を教えている授業もあるが、そうした授業で良好な反応が表れているのは、教員の教授の巧拙の問題ではなく、学生自身が興味を持って学んでいるからだと思う。そのことは教員として非常にありがたく感じている。

2)要望への対応・改善方策

特に要望があったわけではないが、学生の多様化に応じて、ニュアンスの解釈を必要とする言い回しなどは避け、明確で端的な表現を心がけたいと考える。場合によっては、できる限り「やさしい日本語」も併用したい。言語表現があまりにシンプルで即物的になり過ぎると、科目によっては趣旨にそぐわない場合もあるが、現代の教育現場ではそれも程度仕方ないと考えている。むしろ、それでも損なわれることのない本質的なことを確実に教授していきたい。

3)今後の課題

上記に述べたように、学部の授業の反応は学生たち自身の授業への取り組みや態度を反映していると思われるので、今後もさらに学ぶことへの意欲を高めるような授業方法を考えて試行錯誤していきたい。

他方で、大学院の授業のいくつかで学生が他人事のようなコメントをしているのが気になった。大学院は座して何かを教えてもらうところではなく、自ら学ぶところであるという当たり前のことを学生が十分に理解していないことも多分に要因となっていると思うが、やはり教員としてはそうした主体的な学びこそが学びだ、という雰囲気や授業の中に、また学生との日常の関わりの中に醸成していきたい。そのためには、大学院生に対しては時に厳格な態度も必要になるかもしれないと考えている。

以 上